

黙示録22章1-5節 「御座のある都」

1A いのちの水の川 1-2

1B 水晶のように輝く川 1

2B 実を結ばせる木 2

2A 神のしもべたち 3-5

1B 御顔を仰ぎ見る者たち 3-4

2B 御名が記される額 4

3B 栄光に照らされた王たち 5

本文

黙示録 22 章を開いてください。今晚は、初めの 5 節だけを読みます。これは、21 章から始まっている新しいエルサレム、神の都の続きです。新しいエルサレムとは何か？それが 21 章 3 節に書いてありました、「私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」神が共におられるということ、です。これは、エデンの園の時以来、神が人を造られた時から願っておられることです。そして、アダムが罪を犯したというのは、その関係が切れてしまったことを示し、それで神は贖いの働きをその時以来始められたということです。主は、エデンの園からアダムとエバを追放されましたが、けれども、祭壇でのいけにえによって、その血を流すことによって、罪を赦す備えをくださいました。そして、その血による犠牲を中心にした、ご自分の住まわれる幕屋を用意してくださいました。祭壇でいけにえを献げ、至聖所に血を携える、主の住まわれるところです。それがソロモンの神殿にも受け継がれていきました。

神は、そこでご自分の御子を人として遣わされた時に、共に住まわれることを意図して遣わされました。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:14)」この、「私たちの間に住まわれた」というのが、「幕屋を張られた」というのが直訳になります。神は、肉体を取られたキリストによって、幕屋を張られたのです。そして、キリストはご自分の肉体を裂かれましたが、その時に地上の神殿の垂れ幕も、上から下に裂かれました。そして、イエス様は甦られ、昇天された後に、父なる神と共に聖霊を遣わしてくださいました。その聖霊によって、私たちが今、神殿となるようにしてくださいました。「あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでいることを知らないのですか。(1コリント 2:16)」このように、神が私たちと共に住まわれたいという願いは、私たちの集まり、教会において続いています。

しかし、その聖霊の働きというのは、云わば「前味」と言ったらよいでしょう。主が行われる働きの一部を、御霊によって味わわせていただいているのです。使徒パウロは、キリストを信じる者に、

この言葉を適用させているのです。「2コリント 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」つまり、私たちが御霊によって新しく生まれた時に、すでに神が行われるすべてを新しくするという働きの始まりの中に入れさせていただいているのです。

そこで、私たちが21章の天のエルサレムの中に見たものは、その都が至聖所そのものであったということです。長さと同幅、高さの同じ立方体です。大祭司が年に一度、はいて、民のための贖い、罪の清めを行う、主ご自身の御座のあるところは、天のあるものの模型ですが、主の御座があるところでは、その天がそのまま降りてきたのです。だから、そこには神殿がありません。「21:22 全能の神であると主と子羊が、都の神殿だからである。」とあります。また、「21:23 神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」とあります。私たちが神とキリストの中に入るという霊的な出来事は、後の時代には目で見える形で完成するということです。

1A いのちの水の川 1-2

そこで22章に入ります。天のエルサレムにおいて、主が回復してくださるのは「エデンの園」です。いや、それ以上ものです。主が天地を造られ、人を造られて、人をエデンの園に置いてくださいました。「エデン」とは、「実り多い」とか「潤い豊か」という意味です。エデンを源泉にして、四つの川が流れていきました。そして、主はいのちの木を中央に置き、そこから実を食べて永遠に生きるようにされていました。つまりエデンの園に、「永遠のいのち」がありました。使徒ヨハネは、「御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(3:16)」と言いましたが、新しいエルサレムにある永遠のいのちが私たちの霊の中にあると言ってよいでしょう。

1B 水晶のように輝く川 1

¹ 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、

「最後の七つの災害で満ちた、あの七つの鉢を持っていた七人の御使い(21:9)」が、天のエルサレムをヨハネに案内していますが、同じ御使いが「いのちの水の川」を見せています。その特徴は、「水晶のように輝く」ているということです。それもそのはず、「川は神と子羊の御座から出て」いるからです。都全体が、ガラスに似た透き通った純金で出来ており、主の御座は何の混じりけもない聖さがたまたれているからです。私たちがイエスの御名を信じ、この方を受け入れた時に、心に与えられる願いは、清さです。「1ヨハネ 3:2-3 私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」

そして、「いのちの水の川」であります。川というのは、イスラエルのような乾いた土地に住んでいる人にとっては、いのちそのものです。さらに、流れる川の水というのは、いのちを表してそ

の豊かさを表しています。例えば、イザヤがこう預言しました。「48:18 あなたがわたしの命令に耳を傾けさえすれば、あなたのしあわせは川のように、あなたの正義は海の波のようになるであろうに。」主は詩篇には、すべてのものが過ぎ去ってもなお残る都を預言させていました。その都に、豊かな川が流れています。詩篇 46 篇です、山々が揺れて、海のただ中に移っても、水が騒ぎ立ち、山々が揺れ動いても、それでも、「川がある。その豊かな流れは、神の都を喜ばせる。いと高き方のおられる、その聖なる所を。神はそのただ中におられ、その都は揺るがない。神は朝やけまでに、これを助けられる。(4-5 節)」ここから分かることがあります。永遠のいのちとは何なのか？それは、たとえどのようなことが起ころうとも、神が天の御座におられるというところから出て来る、流れてくるような平安や豊かさであると言ってよいでしょう。

そして、イエス様はこれが、ご自分を受け入れる者には内から湧き上がらせてくださることを約束されました。サマリアの女に対して、言われました。「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。(ヨハネ 4:14)」私たちが、神とイエス以外のところから飲めば、必ず再び魂が渇くようなものを、イエスご自身から飲めば、そこには途切れることなく、命から命へ、実に永遠の命に至る水が湧き出ます。すなわち、私たちの内に行なってくださった良い業を、神は天のエルサレムにおいて完成してくださるということです。

そして興味深いのは、「神と子羊の御座」とあることです。ここの「御座」という言葉は、単数形になっています。そして 3 節ですが、「神のしもべたちは神に仕え」とありますが、実際は「彼に仕え」と書いてあるそうです。つまり、神と子羊が「彼」と呼ばれています。ここに、イエス様と父なる神が一つにされていることを如実に表しています。イエス様はユダヤ人に、「わたしと父とは一つです。(ヨハネ 10:30)」と言われました。そして、天のエルサレムにおいても、イエス様が「子羊」と呼ばれていることに注目してください。この方の流された血、その犠牲は永遠に覚えられます。罪を赦してくださったこと、万物がこの方によって和解したことが、いつまでもとこしえに覚えられています。

2B 実を結ばせる木 2

² 都の大通りの中央を流れていた。こちら側にも、あちら側にも、十二の実をならせるいのちの木があって、毎月一つの実を結んでいた。その木の葉は諸国の民を癒やした。

命の水の川は、「都の大通りの中央を」流れているということですが、21 章 21 節に、その大通りの姿が描かれています。「都の大通りは純金で、透明なガラスのようであった。」そのような大通りの中央を、水晶のような命の水の川が流れていました。

そして、ここに両側に、十二の実を实らせる命の木があるということです。この姿は、もちろんエデンの園を思い出させます。創世記 2 章 9 節に、「神である主は、その土地に、見るからに好まし

く、食べるのに良いすべての木を、そして、園の中央にいのちの木を、また善悪の知識の木を生えさせた。」とあります。そして、園を潤している一つの川があって、それが源流となって四つの川が流れている姿を表しています。「2:10-14 一つの川がエデンから湧き出て、園を潤していた。それは園から分かれて、四つの源流となっていた。第一のもの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。そこには金があった。その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。第三の川の名はティグリス。それはアッシュルの東を流れていた。第四の川、それはユーフラテスである。」水の潤いの中で木が生えて、実が結ばれて、それを食べていく姿です。

さらに、イエス様が再臨されて地上に神の国を建てられる時、さらに鮮明にその姿が描かれています。エゼキエル書 47 章です。そこには、神殿から出て来る水があり、それが川となって流れて行っていますが、川は徐々に水かさが増し、渡ることができないほどの深さになりました。そして、「川の両岸に非常に多くの木があった。(7 節)」と言っています。そしてその川は死海に流れ込みますが、もはや死海ではなく、漁のできるような生きた海になり、そして 12 節には、「川のほとりには、こちら側にもあちら側にも、あらゆる果樹が成長し、その葉も枯れず、実も絶えることがなく、毎月、新しい実をつける。その水が聖所から流れ出ているからである。その実は食物となり、その葉は薬となる。」と書かれています。

このように、いのちの川があれば、そこで木が生え、実が結ばれ、その実を食べることができ、葉が薬となるというものです。詩篇 1 篇では、主の教えを喜びとしている人は、そのような人である、実を結び、葉が枯れない、すべてのことが栄える人だとあります。そして箴言には、知恵のことを「いのちの木」と呼んでいます(3:18)。「11:30 正しい者の結ぶ実はいのちの木である。知恵のある者は人の心をとらえる。」「13:12 期待が長びくと心は病む。望みがかなうことは、いのちの木である。」「15:4 穏やかな舌はいのちの木。偽りの舌はたましいの破滅。」

ここで実が結ばれるのが「毎月」というのが凄いです。実が結ばれるのは、例年、いつの季節か、どの月なのかは決まっています。その他の月に実を見ることは期待できません。けれども、毎月実を結ばせているということは、それだけ絶え間なく命が流れていることを表しています。私たちも、神と子羊の御座から、絶え間なく流れている命にあずかり、どんなときにも実を結ぶことができるのだということが言えるでしょう。そして七つの教会の一つ、エペソの教会に対して主は、「勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。(2:7)」と言われました。

そして、「その木の葉は諸国の民を癒やした」とありますが、この諸国の民とは天のエルサレムに出入りしている者たちです。21 章 26 節に、「こうして人々は、諸国の民の栄光と誉れを都に携えて来ることになる。」とあります。千彼らがこれらの葉によって癒しを受ける、とあります。ここで

大事なのは、「絶え間ない癒し」あるいは「慰め」と言ってもよいでしょうか。イエス様が天のエルサレムにおいても、「子羊」と呼ばれていることに注目してください。イエス様が十字架で脇腹が刺され、手足を釘打たれた、その跡は、復活されてからも残っていました。主が復活されていても、神はその永遠の愛のゆえに、イエス様にはその傷跡を残しておられるのです。その打ち傷によって平安が与えられ、傷が癒されるということが、永遠に渡って思い出されるのです。

「癒し」という言葉を、対処療法的に考えはいけません。つまり、病になってその痛みを取り除くための西洋医学の薬のように考えるはいけません。そうではなく、東洋医学にあるような薬があります。それは、病の時に飲むのではなく、絶えず飲んでいて、それで体がそのような病になる状態になるのを防ぐのです。滋養と言ってもよいでしょうか。私たちが、イエス様につながっていることによって、それで霊の健康は守られるのであり、傷を受けているからその時にイエス様に癒していただくとして、それでも神の憐れみがありますが、永遠のいのちとは、絶えず御子の命にあずかっているのです、傷や病から守られているようにするのです。

これで、都の中央から流れているいのちの川と、いのちの木について見ました。エデンの園にある永遠のいのちの回復であり、けれども、それ以上であると言えます。なぜなら、エデンの園には、すでに蛇がいました。そして蛇はエバを惑わし、アダムは罪を犯しました。そして黙示録には、ユーフラテス川には、墮落した天使が鎖でつながれていて、解き放たれると、二億の軍が総人口の三分之一を殺すことが書いてあるし、また、ユーフラテス川から、獣、もう一匹の獣、そして竜の口からかえるような汚れた霊が出て来て、東からの王たちを惑わして、ユーフラテス川を渡らせることも書いてあります。主の園において、ケルブが高慢になって罪を犯し、悪魔となり、悪霊どもが棲みつくようになりました。このような、内側からの混乱や争いから始まるのが創世記です。しかし、もう悪魔は火の池に投げ込まれています。エデンの園の回復以上の回復を、神はここで成し遂げられました。

2A 神のしもべたち 3-5

1B 御顔を仰ぎ見る者たち 3-4

³ もはや、のろわれるものは何もない。神と子羊の御座が都の中にあり、神のしもべたちは神に仕え、^{4a} 御顔を仰ぎ見る。

神が嘆き悲しみながら宣言された呪いを思い出します。主は蛇を呪い、女には苦しみとうめきを与え、そして男には、「大地は、あなたのゆえにのろわれる。」と宣言されました。そして、人が塵からできたのだから、塵に帰る、すなわち死ぬことも宣言されました。それゆえに、全被造物が、その解放のためにうめいているとローマ 8 章 18 節以降で書いてあります。私たちも、このからだを贖われることをうめいているのですが、イエス様は、律法に宣言されている呪いを、木に付けられることによって受けられました。それゆえに、アブラハムへの祝福の約束が、キリストを信じる者に注

がれることを、パウロがガラテヤ書で話しています。

そして、「神と子羊の御座が都の中」にあります。この方に「神のしもべたち」は仕えます。ここで大事なのは、エデンの園でアダムがどのように神に仕えていたか？ということです。呪いを受けた時に、土地が呪われて、それで汗水流して耕さないといけないと言われました。したがって、仕えること自体に呪いはないのです。罪を犯す前のアダムの労働に、回復されることを意味しています。

永遠のいのちというのが何もしないということでは決してないことを知ってください。私たちが、神に仕えることについて抱いてしまう重荷や疲れは、私たち自身が自分たちで抱いてしまっているものであり、イエス様はそのような私たちに対して、「わたしのところに来なさい」と励まされます。「マタイ 11:28-30 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

そして、彼らは、「御顔を仰ぎ見る。」とあります。ここには、神によって全く聖なる者とされている姿が描かれています。天の御国について山上の垂訓でイエス様が語られた時に、「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るからです。(マタイ 5:8)」と言われました。

モーセのことを思い出します。彼は主と顔と顔と合わせて語り合った預言者です。そして、彼が民の前に出て行くと輝いていたので、覆いを付けなければいけないほどでした。それだけ、神の前に出ても、臆することなく話すことができるほど、彼は信仰によって聖められていたことが分かります。けれども、その彼でも実際には、御顔を仰ぎ見てはいませんでした。顔と顔を合わせてというのは、それだけ親密にという表現ですが、実際には御顔は見えていないのです。モーセが、「あなたの栄光を私に見せてください。」と願ったら、主は、「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。(出エジプト 33:20)」と言われて、後ろ姿にある栄光だけをお見せになったのです。そして、使徒ヨハネは福音書の中で、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。(1:18)」と言いました。

しかし、今ここで、御座のある都の中にいる聖徒たちは、御顔を仰ぎ見る事ができています。私たちがこの日を待つことで、ヨハネ第一の手紙によると、今の私たちが清められるし、コリント第一 13 章では、完全なものが来た時には、顔と顔を合わせてみるようになります。

2B 御名が記される額 4

^{4b} また、彼らの額には神の御名が記されている。

既に7章で十四万四千人の神のしもべ、イスラエルの十二部族を見ました。彼らが贖われる者たちの初穂であり、子羊といつも共に歩く人々であります。天のエルサレムの中にいる者たちはみな、このように神の御名が額に記されています。つまり、自分は完全に神のものなのだということです。神の所有物であり、悪魔や罪や他の人々に売り渡されていないのだということです。エペソ1章において、私たちは聖霊によって、「証印」を押されたことが書かれています。そしてパウロは、私たちの体は聖霊の宮であり、「あなたがたは、代価をもって買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。(1コリント6:20)」と言いました。

3B 栄光に照らされた王たち 5

⁵ もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは世々限りなく王として治める。

もはや夜がないことは、21章において既に説明されていました。主がその栄光で輝かせているので、夜はないし、灯の光も太陽の光も要りません。つまり、そこには悪は何一つないということです。ヨハネは第一の手紙で言いました、「私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。(1:5)」

そして、「彼らは世々限りなく王として治める」ということですが、これが永遠のいのちの最後の姿です。どうして王なのか？思い出してください、アダムを神が造られた時は、神の造られた被造物を支配しなさいを命じられたことを思い出してください。神に仕えるということによって、神の被造物を治めるということも行なう時に、それが永遠のいのちなのです。教会についてヨハネは、神とキリストが「私たちが王国とし、祭司としてくださった(1:6)」と何度となく言っています。使徒パウロも、「1コリント6:2-3 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもないではありませんか。」と話しました。

以上、主が永遠の住まい、都として、私たちがどこに入るのかを明らかにしてくださっています。もうすでに、御霊によって始めてくださった新しい働きの延長、完成であることが良くお分かりになったと思います。そして神が初めに天地を造られた状態への回復、いやそれ以上のものであることが分かります。天における反乱、悪魔がすでに滅ぼされているからです。